R3．１１.２６

【なぜ今、百人一首なのか】

|  |
| --- |
| １年生の教室では、11月から百人一首大会が続けられています。子供が総当たり戦を行います。青札20枚で競い合い、勝ち負けの数を表に貼りだしています。26日は、これまでの対戦表を子供の前に提示し、聴き合いを行いました。 |

取組を文で表すと上記のようになりますが、問題はここからです。行間において見えない先生の苦心が伺えます。何でしょうか。私なりに考えてみました。

〇　「百人一首」の構想

　先生は恐らく4月当初から計画を練られていると考えました。なぜこの時期に百人一首をするのでしょうか。

　文化伝承の意味として、冬に行う取組とも言えるでしょうが…。なぜ総当たり戦を行ったのか、対戦表を作ったのか、百人一首の青札２０枚から始めたのか、聴き合いをしたのか、そこに先生の大切なお考えがあると思われます。考える視点としては、教科である国語科として（内容）、願う子供の育ちに向けて（学級経営）大きく２つの側面があります。

話が長くなるので、ここでは学級経営の面の一部を紐解いていきます。これまで１年生は、「野菜づくり」、「そうじ名人」といった体をかけて行う取組を継続的に行ってきました。これらの取組になかったものは相手との勝負です。ある一定のルールの基、一対一の勝負で、明確に結果が出るものはなかった。また、やる気があれば家でも覚えることはできる。先生は子供たちと次のステップに歩み出したのではないか。

　本時では、あまり勝つことができず泣いていた子供がいました。悔しいのでしょう。そのくらいに一生懸命に取り組んでいたとも言えます。自分の努力が足りなかったと悔やんでいたのかもしれません。そのような体験を味わうことは特に低学年では大切なのではないかと思います。大人が思うより低学年の子供は、高学年に比べて後に引きずらないからです。また、容易に乗り越えるものなのです。

今後色札が次々と変わり対戦を続けていくことで、子供たちは自分自身のよさや仲間のよさを互いに深く感じ合えるようになることでしょう。このような成長を期待する上で大切な取組の特徴は、子供が夢中になって継続できる取組です。